

父と兄から学んだこと

高知県立安芸高等学校

二年

坂本

雅治

「みんなと違うからかわいそう。」まだ小学生だった頃の私は、障がいのある父と兄に対して、こんなことを思うことがありました。小さい頃はよく家族で出かけました。動物園や水族館、遊園地にもよく行きました。私が走り回っても、足に障がいのある父には走ることができません。他の親子を見ると楽しそうに一緒に走って遊んでいたのです、そんな光景を目にするにつれ、幼い頃の私はだんだん父の障がいのことについて意識するようになりました。そしてだんだん、父のことをかわいそうだと思うようになりました。店を歩いていても他の人と歩き方の違う父は少し目立つので、ふり返られたりすることもありました。私の兄も障がい者で、兄は発達障害という脳機能の障がいがあります。昔はあまりわからなかったけれど、私が中学生になった頃に兄は養護学校に通っていたので、親に兄のことについて聞くと兄の障がいのことについて話してくれました。そこで兄の発達障がいについて知りました。今までは何の違和感も感じずに兄と接していましたが、そのことを知っ

てから、兄と私の違うところを見つけていることもありました。

障がい者である父と兄に対して私は、「かわいそう」と思うことがありました。父と兄が障がい者であるということ、私が困ることは一つもありませんが、私があたりまえにしていることができない父と兄を「かわいそう」と思ってしまったのです。

でも、その思いも成長するにつれて変わっていききました。

父も兄も、自分が障がい者だということをもまっすぐに受け止めて明るく暮らしています。父はよく川や海にも連れていってくれるし、一緒にキャッチボールもしてくれました。

兄はアニメやマンガが好きで、いろんな面白いマンガを私に教えてくれました。また、自分が買ったお菓子をいつも分けてくれたり、私に「お帰り」や「がんばったね」などと声をかけてくれます。

父も兄も自分が障がい者だからといって弱音を吐くことはありません。もちろん、障がいによって辛い思いをしたり、人とぶつかったりと苦労はたくさんあったと思います。でも今は明るく前向きに暮らしています。父は仕事場でも慕われていて、兄はどんな人にも優しく接します。私はそんな父と兄を誇りに思っています。

最近、障がい者に対する差別や事件などもニュースや新聞で見かけます。障がいのある子供だからといって保育園に入るのを拒まれたり、障がいがあり動けない人を真夏に車の中に放置して、そのまま熱中症で亡くなった人もいました。そのようなニュースを聞くととても胸が痛くなります。また、兄も学校で友達からいやがらせを受けたりしたことがあるそうです。

小さい頃から障がいのある父と兄と関わってきた私は、父や兄のおかげで障がいについて詳しく知り、考えることができました。しかし、障がい者が身近にいない人や、関わらないまま大人になっていくと差別が生まれたり、誤った解釈が生まれると思います。だから、障がい者について、もっと多くの人に知ってもらいたいし、学校での道徳の時間をもっと大切にしたい、実際に障がい者の方と関わって子供の頃から障がいについて考える機会を作りたいと思います。

障がい者になりたくてなっているわけではないかもしれませんが。病気や事故で障がい者になる人も、産まれたときから障がいがある人もいます。それでもみんな自分の障がいと向き合って一生懸命生きています。私達はそんな人達を支え、共に助け合いながら生きていくべきだと思います。

もちろん、私たちが障がい者の人達から学ぶこと、支えられていることもたくさんあると思います。これから、差別や事故が無くなるように、たくさんの人に障がいについて考えてもらいたいと願っています。

人はみんな、誰かに望まれて産まれてきます。障がいの有無は関係なく、人の命は全てこの世に一つだけの奇跡なのです。そして人には基本的人権があり、それを障がいがあるからという理由で差別され、侵害されることは決して許されることではありません。私はそのことを父と兄を通じて学ぶことができました。父と兄にはとても感謝しています。

私はこの先、障がい者の方と関わることもあると思います。その時には優しく親切に接し、そんな人達の役に立てる人間になりたいです。

「かわいそう」から「かっこいい」へと、私の障がい者の方に対するイメージが変わりました。そしてこれからも障がい者の方から学んだことを大切にしていきたいと思います。